春秋彩

Syunjusai

特集
「地域とともに歩む」 …… 2

活躍する卒業生 …… 7

国際交流 …… 8

研究活動紹介 …… 10

大学の動き・Information …… 12

活き活き元気種 …… 14

イベント情報・おすすめの１冊 …… 15

熊本県立大学広報誌
2008 AUTUMN
vol. 29

熊本県立大学

春秋彩とは 万葉集の額田王の春秋を論じた歌の題詞「春山の万花の艶と秋山の千葉の彩」から採ったもの。「春秋」には年月の意味もあり、「春秋に富む」若者を彩る学園の四季を表している。

あいさつ

学　長
米澤　和彦

このたび、紫苑会（同窓会）のご協力により、図書館2階に「熊本県立大学アーカイブ」を開設しました。この展示コーナーを見れば、本学の60有余年にわたる輝かしい歴史と伝統は、一目瞭然です。

このアーカイブの中で注目に値するのは、「熊本女子大学郷土文化研究所」の存在です。詳細については、文学部大島明秀講師の立派な解説書をぜひご覧いただきたいと思いますが、中でも特筆すべきは「歴史学研究部」の学生たちの活躍です。学生諸君はたんなる先生方の研究協力者ではなく、共同執筆者として『肥後藩の農業構造』等の優れた著書を公刊しています。これらのことは、本学の「地域実学主義」という理念が、設立当初より脈々と生き続けていることの何よりの証左でしょう。

さて、「未来」が「過去」の裏返しであるとするならば、われわれはこれらの歴史から学ぶことは数多くあるはずです。今後、地方分権が進行する中で、地域密着型の公立大学の果たす役割はますます重要なものとなってきます。

今こそ、「地域に生き、世界に伸びる」をスローガンに大学の価値の向上と、地域に根ざしつつ、世界に向かって大きく羽ばたいていく有為の人材の育成に邁進したいと考えています。

特集

地域とともに

地域に根ざした教育

本学では、「現場に学び実践力を育む」という地域実学主義に基づく「特色ある教育」を展開しています。今回は、その中から総合管理学部で行っている「KUMAJECT」の取組をご紹介します。

プロジェクトリーダー
総合管理学部　准教授
上拂　耕生

KUMAJECT 2008

総合管理学部では昨年から、人吉球磨地域を対象としたプロジェクト＝ＫＵＭＡＪＥＣＴ（くまじぇくと）に取り組んでいます。この取組は、「問題解決のための総合力」を学生たちに身につけて欲しいという教員の思いから始まったものです。今年は30名の学生が、自主的に参加しています。

昨年のＫＵＭＡＪＥＣＴ2007では、「人吉球磨を持続可能なコミュニティにするための政策を提言する」というテーマを設定しました。そして学生たちは、現地調査や地元住民へのアンケート、農家民泊の体験などに基づいて提言をまとめ、今年の3月には現地で最終報告会を実施し、様々なアイデアを提言し、地元の方々と意見交

現地での最終報告会（今年3月）

に歩む

熊本県立大学は、「地域に生き、世界に伸びる」をスローガンに掲げ、熊本県土全体をキャンパスとした教育研究活動を行っています。

換しました。

今年のＫＵＭＡＪＥＣＴ2008では、「より深く掘り下げた形で、より具体的な提案をし、地元と人の役に立ちたい」と考え、「人吉球磨地域の魅力を、若い世代に向けて発信するしくみをつくる」をテーマとしました。8月31日には現地訪問を行い、球磨村の郷土料理を味わったり、城下町の風情を残す人吉市の鍛冶屋町通りを訪問しました。今後も、教員・学生によるＫＵＭＡＪＥＣＴ2008は、最終目標に向かって進んでいきます！

球磨村での郷土料理の試食

人吉市での現地調査

参加学生の声

■総合管理学部　2年　松本美里さん(写真中央)

私がＫＵＭＡＪＥＣＴに参加したのは、大好きな熊本をもっと知り、大学時代にしかできない体験をしたいと思ったからです。

人吉の街中を歩いて調査したり、農家民泊で農業体験をしたりと、授業では味わえない体験の連続ですし、地域の方とのコミュニケーションなど、どれをとっても新鮮でおもしろく、人吉球磨地域の魅力にハマってしまいました。

ＫＵＭＡＪＥＣＴを通して出会った地元の人達と連絡をとり合ったり泊まりに行ったりもしています。

先生方から与えられたテーマにそって調査や課題をこなしていくのは、決して楽ではなく、自分達の考える力を多く求められていた気がします。

考えるだけでなく、資料やパワーポイントの作り方、プレゼンの仕方まで学ぶことができ、確実に力がつきました。

今年は2年目なので、去年以上のものを作りたいですし、自分自身もさらに成長していけたらいいと思います。

■総合管理学部　3年　深水拓郎さん(写真中央)

私は、ＫＵＭＡＪＥＣＴの最大の特徴はプレッシャーがあるところだと思います。それは「プロジェクトのそれぞれの段階ごとの期限内に成果物を完成させないといけない」という時間的なプレッシャーや、「枠組み以外は自主的に決めて、能動的に行動しなければならない」というプレッシャー、「自分たちが創ろうとしているものの先には、それに期待をしている受け手である地域の方々がいる」というプレッシャーなど、あげていけばきりがありません。

このように書くと、ＫＵＭＡＪＥＣＴというのはプレッシャーが多く、普段の講義よりも学生の負担が多いものだと考える方も多いと思いますし、実際にはそのとおりです。ですが、そうだからこそＫＵＭＡＪＥＣＴは普段の講義とは一味違った経験と、それによる成長を参加学生にもたらすのです。緊張感の無い中では人は堕落してしまいます。適度なプレッシャーと、提言の先には受け手である地域の方々がいるという意識が、ＫＵＭＡＪＥＣＴの特徴であり、他の講義と異なる点です。

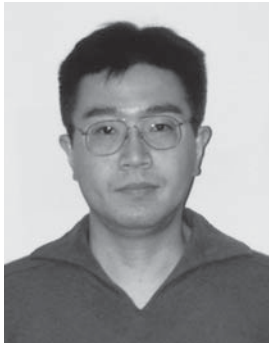
提言に向けて…

ＫＵＭＡＪＥＣＴ2008は、参加学生の頑張りと、また関係者の協力もあって、ここまで順調に進んでおります。今後は、10月末と11月中旬に、人吉球磨地域の魅力を探索するために現地調査・取材を行う予定です。そして12月には、現地で最終報告会を実施したいと考えております。最終的な目標としては、魅力をどのように発信するかについて提案書を作成し、ウェブサイトを制作することなどを目指しています。

地域における研究活動

熊本県立大学では、地域の抱える課題の調査研究を行い、研究成果を地域に還元する「研究活動を通じた地域貢献」を積極的に進めています。

今回は、文学部　米谷隆史准教授の「天草アーカイブズの文献調査」と「荒尾干潟の環境を改善し、アサリ漁を復活させるための研究」に取り組む環境共生学部　堤裕昭教授の活動をご紹介します。



文学部　准教授
米谷　隆史

天草アーカイブズでの文献調査から

ここ8年ほどは、国文学研究資料館という組織から地域調査員として委託を受け、本学の同僚とともに対馬宗家文書、島原松平文庫、臼杵稲葉家旧蔵書、細川家永青文庫等の文献調査を行う機会に恵まれました。学部学生との共同研究でも、県立図書館や八代市博物館、美里町恵照寺にお世話になっています。

天草アーカイブズ(文書館)が保管・管理する資料群の調査には、既に多くの実績を積み重ねている天草史料調査会のメンバーに昨年から加えてもらったことで参加するようになりました。新参者なのですが、襖の下張に使われた古文書の発掘作業の他、新たな観点から文献を見つめる経験をしています。

旧家の蔵には、金銭や土地の証文、役人の触状、書簡、当主の日記、手習いの教科書、当主や家族がひねったと思われる和歌や俳句の写本、四書五経の版本やその解説書、百人一首や徒然草の版本等々、多様な文献が残っています。明確な区切りはないのですが、当主の日記や手習いの教科書あたりを境にして、証文等、前の方に並べた文献は「古文書」として、各種版本等、後の方に並べた文献は「古典籍」として扱われることが多いようです。そして、概して、歴史研究者は「古文書」を、文学語学研究者は「古典籍」を重視する傾向にあります。

「古典籍」の多くを占める江戸時代の版本は印刷物ですから、多くの「古文書」のように、ある情報を伝えるものが唯一無二ということはありませんし、珍しさを問わなければ、専門の古書店で数百円ほどの値段で大量に売られています。アーカイブズにある書物群も、天草を離れてバラバラになれば、古書としての値段が、その価値の全てとなってしまいます。

しかし、書物や紙が極めて高価であった江戸時代に、ほかならぬ天草で購入、書写された書物(群)は、同じ家の「古文書」が語る家の歴史や経済状況と併せて見る時、地域の歴史を知る上での大切な情報を蓄えているように思います。書物の裏表紙などに見られる所蔵者や購入・書写年月日の記載から、各時代の地域文化が江戸や上方の文化の流れとどのように繋がっていたのかを読みとっていくことも可能でしょう。

今年に入って、高浜焼の発展に力を尽くした上田家の「古典籍」が未整理のまま残されているというありがたい情報が届きました。400年以上前に天草で刊行されたキリシタン版、中でも天下の孤本であるローマ字綴りの『平家物語』(FEIQE　MONOGATARI)や『イソップ物語』(ESOPONO　FABVLAS)の断簡が、襖の奥から出て来はしないか、という山師根性も捨て去ることはできないのですが、まずは、天草の「古典籍」の価値を多方面から見出していくことができればと考えています。

襖の下張に使われた古文書の発掘

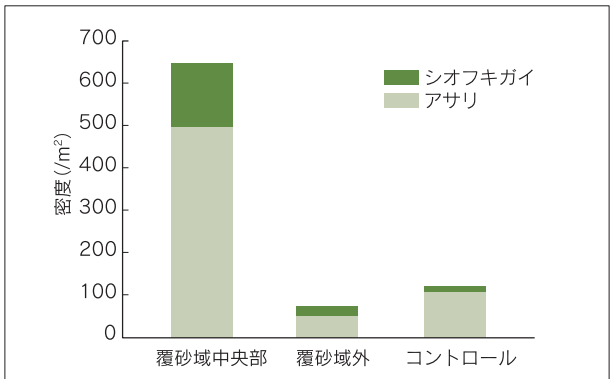
環境共生学部　教授
堤　裕昭

荒尾干潟の環境を改善し、アサリ漁を復活させるための研究

有明海東岸に面する荒尾干潟には約1,600haに及ぶ広大な干潟が広がっています。ここでは、1990年代前半まで、少なくとも年間数千トンのアサリが獲られ、アサリ漁に沸いていました。しかしながら、その後、漁獲量が激減し、現在ではアサリやシオフキガイなどの二枚貝類が１平方メートルあたり数百個体程度しか生息していません。かつてのようにアサリ漁が賑わうためには、この数十倍の貝類が生息していなければなりません。なぜ、このような貝類の乏しい干潟ができてしまったのか？

私の研究室では、その原因を究明し、再びアサリをはじめとする二枚貝類が豊富に生息する干潟に戻すために、どのような対策が有効であるのかを探す研究を2000年から続けています。2005年からは、「文部科学省科学技術振興調整費・有明海生物生息環境の俯瞰型再生と実証試験」という研究プロジェクト（研究代表者：楠田哲也（九州大学大学院工学研究院・特任教授）からの研究委託を受けて、実際に干潟の環境を改善し、貝類が豊富に生息できる場所を創る実験を行ってきました。（現場実験や調査には、荒尾市漁業協同組合の協力を得ています。）

なぜ、貝類のほとんど生息しない干潟ができてしまったのか？その理由として今もっとも注目しているのが、干潟への砂の堆積量が激減したことです。これは有明海に注ぐ一級河川で1960年代頃より大量の川砂を採取したために起きました。2000年に、採取は全面的に禁止されましたが、この約40年間に膨大な量の砂が取られ、コンクリートの材料に使われました。一方、荒尾干潟では、砂に二酸化マンガンが高濃度に堆積しています（約1,500～3,000μg/kg）。二酸化マンガンは、阿蘇山などの火山地帯の岩石や土壌には多く含まれるので、川をつたって干潟に堆積したと考えられます。まだ推論の段階ですが、砂の堆積量が激減したことによって、同時に堆積する二酸化マンガンの濃度が砂によって薄められなくなり、結果として濃度の上昇が起きたのではないかと考えています。現場実験の結果では、このような干潟に二酸化マンガンの少ない新しい砂を撒くと（写真）、そこだけは見違えたように貝類が豊富に生息するようになることがわかってきました（図）。



図／代替砂を混ぜた覆砂実験開始から約1年後の貝類の生息密度（2007年11月25日）
（覆砂域外は覆砂した場所のすぐ外側、コントロールは約200m離れた場所

ところが、干潟に撒く新たな砂を入手することは、とても難しく、干潟に砂を撒くために、どこかの川や海の底から砂をさらっては、意味がありません。そこで、現在、砂の代替物を捜して、それを使って貝類を干潟に復活させる実験を行っています。写真に示した実験でも、自然の川砂に50％の分量で代替砂を混ぜました。見た目にはほとんど自然の砂と区別がつかないし、もちろん事前にマンガンをはじめ、生物の生息に影響を与える物質が含まれていないことを確認しました。この代替砂を使えば、貝類を干潟に戻すことができることを期待できる結果が得られつつあります。

写真／（左）荒尾干潟において、川砂と代替砂を50％ずつ混ぜて覆砂実験を開始した（2006年10月、10m x 10m x 0.5m）
（右）覆砂から約１年半後（2008年4月、18m x 25m x 0.15m（平均の厚さ）に拡大したが、撒いた砂のほとんどは現場に残った。）

地域の期待に応える！熊本県立大学の地域貢献

「大学の地域貢献度ランキング」調査で本学が全国2位!!

進む少子・高齢化、高まる生涯学習ニーズ、そして、地方分権社会への対応…多くの課題を抱える地域社会。そこには、今、大学の力が必要とされています。

本学も地域と連携した取組に力を入れ、様々な活動を行っていますが、そうした取組が評価され、日本経済新聞社が実施した今年度の「大学の地域貢献度ランキング」において、本学が全国第2位となりました。（日本経済新聞 平成20年10月20日掲載）

今回は、地域と連携した数ある取組の中でも、本学の研究成果を活かした2つの特色ある地域貢献活動をご紹介します。

食の拠点として地域をリード!

本学では、平成18年12月に「くまもとさんち（産地）の食育ビジョン」を策定し、食に関する各種講演会、研修会、食育プログラムの開発など、食に関する様々な取組を行っています。

これらの取組の一環として、食環境研究情報室では食に関する書籍や雑誌、DVDなどを常備し、様々な情報提供を行うとともに、食に関する研究成果を活かし、「食の安全安心Q＆A」「食育推進計画策定マニュアル」など発行しています。

また、毎月19日（食育の日）には、学生食堂において包括協定締結自治体の特産品などを使った食育メニューを提供し、食の安全安心、健康になる食事バランス、地産地消などに関する情報提供を行っています。

注目の「地域ブランド」を学ぶ－「くまもとブランド塾」を開催！

熊本県内の事業主や包括協定先などの職員等を対象として、地域連携学習会「くまもとブランド塾」を開催しました。この学習会は、マーケティングやブランドに関する専門家である本学総合管理学部の棟方信彦准教授らが、熊本県地域政策課と合同で企画・実施したもので、注目の「地域ブランド」が学べるとあって、9月16～17日に本学で行われた「基礎コース」には54名、10月6～7日の1泊2日で阿蘇において行われた「実践コース」には24名の参加がありました。

参加者は、「基礎コース」で棟方准教授と九州大学清須美教授、（株）電通中部支社の若林氏からブランドについての理論と地域ブランドの実例を学び、「実践コース」では参加者が持ちよった商品をもとに実際にブランド化するというワークショップを行いました。

「基礎コース」講義（棟方准教授）

「実践コース」ワークショップ

大学の持つ英知を地域に…地域連携センター

様々な知的情報、知的資源を有する大学。本学にも多くの英知が結集されています。大学の持つ英知を地域社会にどのように還元していくか…。本学では、「地域連携センター」を設置し、センターが相談窓口となり、大学と地域とを結ぶコーディネーターの役目を担っています。各種公開講座の開講をはじめ、共同研究、講師の派遣等のご相談にも迅速に対応しますので、ぜひ、ご活用ください。

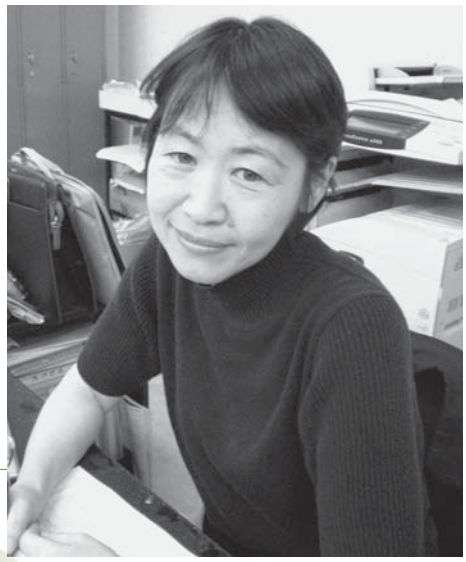
地域連携センター
TEL 096-383-2929 内線500、515 FAX 096-387-2987
E-Mail renkei-c@pu-kumamoto.ac.jp

活躍する卒業生

さまざまな分野で活躍する熊本県立大学の卒業生を訪ね、現在のお仕事や、ご自身の学生時代について、語っていただきます。

熊本市に本社をおき、取材・編集から広告制作、販売促進の企画と幅広い事業を展開する株式会社「談」。今回は、チーフ・ディレクターとして活躍する稲﨑さんに、お話を伺いました。

株式会社　談　チーフ・ディレクター
稲﨑　裕子さん



Profile プロフィール
熊本県立大学の前身である熊本女子大学文学部国文学科卒業(29回生)。
高校講師・予備校講師を経て、1994年(株)談に入社。現在に至る。

時代は変わり、仕事も、「私」も変わる。新しいことを恐れるな。

知らない人に会うのが、仕事

職種は営業である。初対面の人に会うことが、かなり多い。「弊社は熊本市で企画立案をしておりまして…」と切り出すと「キカクって、何？」という顔をされる。「広報や販売促進のご提案をいたします」。さらに「例えばHPですとか、パンフレットですとか」。それでようやく、ああ、納得、という顔。そこからオモムロに、売上や知名度を上げるために川上から川下まで、つまりどんな商品を売るかという商品企画から、その売り先(販路開拓)、買ってくれる人をより知るためのリサーチ、そして販売促進活動、それもパンフレットだったり、ネットだったり、イベントだったり、目的によって手段はイロイロ、さらにもっと根本的に売る「人」を良くする、人材育成もいたします…と説明に取り掛かる。

論文書きは論理的思考の訓練

こんなことを繰り返して、早や15年。名刺ファイルを何度買い足したことか。しかし最初から「営業マンになろう」と思っていたわけではない。入社時はライター、つまり何がなし「文章を書く人」志望だった。取材で県内の市町村は全制覇、毎月、福岡に出かけていた時期もある。歴史モノだったので、随分有名人の墓を訪れた。卑弥呼(と、言われている…)、黒田藩の始祖·如水長政親子、作家の檀一雄…。それはそれで楽しかったが、如何せん、原稿書きだけでは食べていけない。一方でお客様から、取材力を生かして消費者のニーズを聴き取ったりできる？などと問い合わせもある。他にも、読者が女性だから「女性の感性で」情報誌を作ってほしいと頼まれたり…というわけで、現在の私はある。

国文学科出身の私にとって、学生時代の勉強は意外に仕事に直結している。文章を書く時も、その後、他のライターさんのデスクをする時も、特に文法の基礎知識は役立った。営業マンになって企画書を書くようになると、レポートや論文書きは論理的思考の訓練だった、と今になって分かる。(ごめんなさい、先生方！)

変化できる者が、生き残る

かのダーウィンは言った「変わることのできる者だけが、生き残る」と。時代は、変わる。会社も変わらないと生きていけない。逆説的だが、これは不変の真理といえる。「日日是新事」。私自身、新しいことにチャレンジすることなど、しょっちゅう。ただし、仕事は完結してこそ、仕事である。最後まで全うする「気構え」は必要(できる、できないは、また別問題)で、これも鉄則。その気持ちがあれば、どこでだってやっていける。学生の皆さんには、何より「新しい世界に踏み出すことを恐れるな」と伝えたい。

国際交流

～世界を学ぶ、海外と交流する～

International Exchange

世界を学ぶ

総合管理学部　今里佳奈子　准教授は、昨年12月26日から今年9月17日にかけて、イタリアとスウェーデンの2か国に留学されました。

留学先：イタリア　ボローニャ大学（ボローニャ）
研修期間：2007年12月～2008年5月
留学先：スウェーデン　ストックホルム大学（ストックホルム）
研修期間：2008年5月～9月

ヨーロッパにおける福祉レジームの比較研究

［海外研修報告］

総合管理学部　准教授　今里佳奈子

グローバルスタンダードを標榜するアメリカとは一線画した道を歩みつつあるヨーロッパの国々。そのヨーロッパの中でも特に対照的に見える2つの国でローカル・ガヴァナンスと福祉レジームに関して比較研究をしてみたい…。この欲張りな願いを今回かなえて戴き、2007年12月から2008年9月まで、ボローニャとストックホルムという特徴のある2つの都市に滞在、研究をすることができました。

世界で最も美しい首都といわれる森と水の都ストックホルム。現在この都市で最も目立つのは大きな乳母車を押すお父さん達の姿です。少子化の危機が叫ばれる日本を尻目にストックホルムは現在大ベビーブーム。羨ましい話ですが、それを可能にしているのがストックホルム市民をして「ここでは子どもがいないと損をするからね」とまで言わせる手厚い子育て支援と「子どもも仕事も」を可能にする様々な仕組み。例えば子ども1人で1月約18,000円、2人で約40,000円、3人で約65,000円という児童手当（16歳まで）や大学まで無料の授業料。塾も存在しないゆとり教育や1クラス20人程度の学級編成。これに加え450日の両親休暇（育児休暇）と所得の8割を補償する両親手当（390日まで）。さらに男女雇用者のほとんどが完全消化するという5週間の法定有給休暇。民営化も進み以前とは様変わりしているとは言え、依然国民的合意に基づく「元祖福祉国家」の姿を見ることができました。

一方のボローニャは世界最古の大学の存在で知られる「中世の街」。街の中心部は歴史的保存地区に指定され、住居、商店、小中学校、大学、時には自動車修理工場さえこれら15、16世紀の歴史的建造物の中に居を構えています。イタリアでもトップクラスの生活の質水準を誇るこの街ではボランティアや協同組合の活躍が目立ちました。小売業の60％のシェアを占めるともいわれるＣＯＯＰをはじめ、障がい・高齢者福祉、雇用支援、移民支援、農業など様々な分野で「協同組合」が社会を支える大きな力となっていましたし、また層の厚いボランティア（特に中高年ボランティア）が高齢者の社会参加や社会的弱者のエンパワメントに大きく貢献している様子も見ることができました。

公的サービスが社会を支えるストックホルムと協同組合やボランティアの活躍が目立ったボローニャ。住民の暮らしを豊かなものにするガヴァナンスのあり方を体感できた10か月間でありました。

ストックホルム市広報官のサンドラ・リンドさんと。「大学で教職→ＩＴ企業で企画→ストックホルム市役所広報官→１年半の育児休暇→現職に復帰」というリンドさんのキャリア（乗り換え多数・子どもと仕事の両立）は、スウェーデンの多くの女性がたどるキャリアでもあるようだ。なお、充実したサービスを支えるストックホルム市（人口約80万人）の職員数はなんと48,000人。

社会センターを運営するボランティアの方達と。ボローニャ市内に35か所ある社会センター（Centro　Sociale 公民館と憩いの家を合わせたような感じ）は中高年のボランティアによって運営されている。様々なイベントやサークル活動には元気な中高年がたくさん参加。センター内には美味しいエスプレッソとお酒が飲めるバール（Bar）があり、「一杯やりながら四方山話」の高齢男女の姿はいかにもイタリアらしい。

世界に伸びる大学を標榜する本学では、「国際性の推進」を三大理念のひとつに掲げています。その理念をより具現化するため「国際交流ビジョン」を策定し、「学生」、「学術研究」、「地域」、それぞれの視点から全学的に国際交流活動を推進しています。

海外と交流する

韓国祥明（サンミュン）大學校は本学の姉妹校であり、短期交換留学生をはじめ、短期語学研修団の相互派遣など、学生交流において着実でかつ活発な国際交流を行っています。これに加え、教員同士の学術交流がついにその一歩を踏み出すことになりました。

[祥明大學校] 設立:1937年　所在地:大韓民国忠清南道

文学部　馬場教授による開会あいさつ

第1回「祥明大學校・熊本県立大学学術フォーラム」

［開催報告］

文学部　教授　馬場良二

2008年9月4日の木曜日に、私たちは韓国の仁川空港に降り立ちました。韓国の文化探訪団として祥明大學校に向かう短期研修団の学生9名と文学部日本語日本文学科の半藤英明教授、山﨑健司教授、そして、馬場です。入管の審査を終え、荷物を取り、両替して自動ドアを出ると、祥明大學校のホームステイ先のホストファミリーが待っていました。「はじめまして」とは言いません。学生たちは、「○○ちゃーん」と言いあいながら手を振り、近づき、手を取りあっています。祥明大學校と本学との交流はすでに20年にわたり、とくに学生間の交流は順調で、すでに本学のキャンパスで知り合っている学生が多くいるのです。

写真左から　半藤教授、韓教授、山﨑教授、金副教授

半藤、山﨑、馬場が韓国へ行ったのは、祥明大學校で開催される第1回「祥明大學校・熊本県立大学　学術フォーラム」に参加するためです。

フォーラムは、2008年9月5日（金）午後1時から開催されました。

祥明大學校と本学とが姉妹提携を結んだのは、1990年の5月でした。文学部の副専攻課程である日本語教育課程、その教育実習の場を提供していただくという形で交流が始まりました。日本語教育について学び始めたばかりの本学の学生が韓国へ出向き、祥明大學校の日本語専攻の学生に日本語を教えました。その翌年からは、祥明大學校からの短期研修団が本学をおとずれるようになりました。その後、夏休みに本学から韓国文化探訪団も祥明大學校をおとずれるようになり、両校の交流はますます盛んになりました。が、教師間の交流、そして、学術的な交流はほとんど行われてきませんでした。

1990年にはじめて祥明大學校を訪問して以来、両校の交流が軌道にのるまでこの交流の継続と進展にご尽力くださったのが祥明大學校で日本語の教鞭をとっていらっしゃった金尚珍（キムサンジン）先生です。先生が教壇を離れられてから10年以上がたち、今ではそのご子息が祥明大學校の日本語文学科で平安文学を講じておいでです。ご子息にお願いし、去年教育実習生の引率の折、先生にご挨拶しました。

私が、「来年は貴学と本学とで学術フォーラムを開催しようと思う」と言おうとした時、先生が「交流も20年。そろそろ何かしら記念となるものをしたほうがいい。」とおっしゃいました。それで、さっそく日本語文学科の先生にお話し、今回のフォーラム実現となりました。

今回のフォーラムのテーマは、「日本語と日本文学をみる、二つの視点」でした。祥明大學校の韓先熙（ハンソンヒ）教授は「一般的、事実的な条件表現の「と、たら、ば」の習得について」、金裕千（キムユウチョン）副教授は「平安文学に見られる「高麗（こま）」」、本学の半藤英明教授は「日本語助詞「は」と題目」、山﨑健司教授は「『萬葉集』遣新羅使人歌群－実録と脚色－」という題目で発表しました。

今年は、韓国へ日本語日本文学科の教員がまいりました。来年は、日本へ英語関係の研究者をお呼びできればと思います。さらにその次は、他学部の研究者が韓国へ、さらに別の分野の研究者を日本へ、となれば理想的です。

日本環境化学会「学会功績賞」を受賞して

環境共生学部　教授
篠原　亮太

本年6月12日に開催の第17回環境化学討論会で、日本環境化学会より「化学物質の環境動態研究と学会への貢献」を評価いただき、「学会功績賞」を受賞いたしました。同日、環境化学討論会の場で、「水環境における微量化学物質の化学構造変化体の検出と生態毒性」と題する受賞記念講演をさせて頂きました。

受賞という大きな節目に、これまで歩いてきた研究への道を振り返ってみたいと思います。

私が、環境中化学物質の調査を開始しましたのは、昭和48年に北九州市環境衛生研究所（現北九州市環境科学研究所）に入職後1年目でした。水俣病問題に端を発する公害問題に対し、公害対策基本法が施行され、全国で公害対策が実施され始めた時期でもありました。当時の研究所所長は、鹿児島大学医学部衛生学教室から転身された新進気鋭の故秋山高博士でした。秋山所長の口癖は、「ルーチン業務の合間は、外国雑誌の論文を読め」「実験した結果は、必ず論文にせよ」でした。当時の研究所職員は、団塊の世代が8割を占め、平均年齢は24～25歳でした。その中には、現在本学の副学長をされている古賀実先生（環境共生学部教授）の若き姿もありました。洞海湾の浚渫（しゅんせつ）が開始され、北九州市も環境改善の兆しが見え始めたころでもありました。当時私は、水銀の分析を担当していたため、朝から晩まで、洞海湾のヘドロ、髪の毛、魚介類中の水銀分析に没頭していました。

秋山所長は、私に「大学で合成化学を学んできたなら、質量分析計を使ったことがあるだろう。来年研究所の建て替えをやるが、同時にGC/MS※1を購入する予定なので準備しておきなさい」と指示されました。そこで、若い研究所員の有志が集まり、質量分析についての勉強会を始めました。さらに所長は、吸着材として売り出されていたXAD-2樹脂※2に関する論文を私に渡し、「これは濃縮にも使えるので検討しておくように」と指示されましたが、これが将来私の学位論文に繋がるものであるとは夢にも思いませんでした。

当時のGC/MSは、キャリアーガス※3を除去するエンリッチャー※4と呼ばれるGCとMSの接続器が必須であり、GCにはパックドカラム※5を装着したもので、定量感度は現在のGC/MSに比べると1/100～1/1000でした。そのため、水環境中の微量化学物質をスクリーニング※6するには大量のサンプルを濃縮する必要があり、先に用意したXAD-2樹脂カラムがここで大活躍することになりました。

様々な環境試料をGC/MSで分析するうちに、今では周知の事実ですが、環境常在成分とも言える多環芳香族炭化水素（PAH）の存在を知りました。この当時PAHは、化石燃料の不燃焼においてデ・ノボ反応※7で生成することは、すでに明らかにされていましたが、環境中でどのように挙動あるいは変化するかは未知の状態でした。水環境中でのPAHの変化を明らかにすることは、濃度的にも時間的にも不可能と考え、活性汚

泥を用いて好気的な分解プロセスを明らかにすることにしました。この一連の研究に対して、1980年に岐阜薬科大学で薬学博士の学位を頂きました。

1994年に北九州市は、河川や海などの環境水に加え、上水と下水の研究を総合的に行うアクア研究センターを新設しました。幸運にもセンターの所長に任じられ、洞海湾再生事業、おいしい水製造の研究、下水の再利用の研究、化学物質の多成分同時分析法の開発などを開始しました。洞海湾再生事業では、本学の生活科学部の堤先生(現環境共生学部教授)と共同研究を進めていました。堤先生の強い薦めもあって、1999年に熊本県立大学に環境共生学部が設置されると同時に、北九州市の職を辞して大学教員となり、環境の研究と環境エキスパートの養成教育に携わることになりました。学部が新設されて3年目に、ようやく卒業研究を行う4年生が研究室にやってきました。これを機に、北九州市時代から持ち続けてきた「環境中での化学物質の変化と生態影響」の研究を本格的に開始しました。

GC/MSによって、農薬、プラスチックの可塑剤、炭化水素系溶剤、化石燃料燃焼生成物、芳香剤など多岐にわたる化学物質が水環境中に存在していることを明らかにしました。これらの化学物質は、水環境中で一部水生生物や底泥に濃縮されるものの、ほとんどのものは顕著な濃度増加を起こさない傾向にあることが分かってきました。つまり、水環境から検出される物質数は年々増加するが、その濃度は予想されるほど増大していないことに気付きました。この理由として、水環境へ放出された化学物質は、酸化分解、置換、付加などの物理化学的あるいは微生物学的作用によって、化学構造が変化していると推定されます。

一般に化学物質は、環境中に放出されると光、空気、熱、微生物などによって分解されますが、実際には、その分解過程については、ほとんど明らかにされていません。化学物質が環境中で徐々に変化し、これが生態系へ何らかの影響を与えているとするならば、環境中で化学構造の変化した物質を追跡していくことも重要な研究課題であると考えました。

今回の受賞記念講演では、これまで学生や大学院生とともに進めてきた化学物質の環境中動態研究の一端を紹介させて頂きました。特にPCBの分解と毒性に関する研究では、本学大学院環境共生学研究科で第一号の博士(環境共生学)を誕生させることができました。

環境研究は、いよいよ複雑化し専門性の高い研究の時代に入っています。公害問題から環境問題への変質が、地方自治体の環境に係わる研究機関を衰退させているのも現実です。この複雑化した環境問題に対処していくには、大学、自治体研究所、それを支える環境関連の企業が一体となって、我々の研究成果は社会に対してどのような貢献をし得るのか、絶えず自問しながら研究を進める必要があると考えます。

※1 GC/MS
ガスクロマトグラフ(GC)と質量分析計(MS)が一体化した装置で微量化学物質の分析に広く用いられる。

※2 XAD-2樹脂
多孔質のビーズ状樹脂で、水中微量化学物質の吸着剤として使用されるもの。

※3 キャリアーガス
GC内において、混合有機物ガスを移動させ分離させる移動相で、一般的にはヘリウム、窒素ガスが用いられる。

※4 エンリッチャー
GCとMSを連結するもので、GCから出てくるキャリアーガスを除き、サンプルを濃縮する装置

※5 パックドカラム
ガラス管の中に有機物を分離するための充填剤を詰めたもの(旧式のGC分離カラム)。

※6 スクリーニング
環境試料から微量化学物質を探し出すこと。

※7 デ・ノボ反応
小さな炭化水素分子(ガソリンや軽油など)が、不完全燃焼によって分子量の大きな炭素水素に変わる反応。

大学の動き

委嘱状交付式での潮谷氏と蓑茂理事長

潮谷義子前熊本県知事が本学客員教授に就任

6月4日、潮谷義子前熊本県知事に本学客員教授委嘱状を交付しました。客員教授制度は、教育研究の充実と大学の活性化を図ることを目的に、平成19年度から導入したもので、現在、潮谷氏の他、宮崎暢俊氏（前小国町長）と葉祥栄氏（建築家）の3名にご就任いただいています。なお、潮谷氏による特別講義を次のとおり、実施します。

日時：12月5日（金）　12:50～
場所：大講義室
内容：ユニバーサル・デザイン(UD)について

女子大時代の石製表札

「熊本県立大学アーカイブ」展示コーナー開設

紫苑会（熊本県立大学同窓会）のご支援のもと、図書館2階に「熊本県立大学アーカイブ」展示コーナーを9月1日開設しました。

アーカイブは、本学の歴史と伝統を伝える貴重資料を収集・保存するもので、その中から研究書、各種発行物、女子大時代の石製表札など大学創立期や節目の記念物を中心に常設展示しています。たくさんのご来館をお待ちしています。

展示コーナー／図書館2階
開 館 時 間／平　日8:40～21:40
土曜日8:40～19:00　日曜日は休館

Information

講義情報やキャンパス情報は、情報表示機でチェック!!

今年4月から情報表示機（大型ディスプレイ）を大講義棟ロビー、講義棟ロビー、学生食堂、図書館、本部棟ロビーの5か所に設置しています。

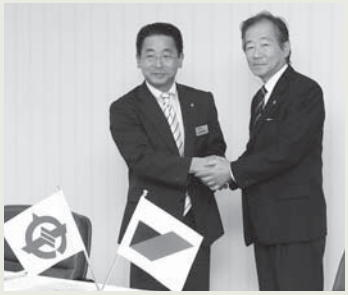
各か所の設置台数は2台で、うち1台は講義に関する情報（休講、補講、教室変更、履修登録、集中講義等）を、もう1台はその他のキャンパス情報（就職セミナー、奨学金、学内イベント、学生自治会、サークルからのお知らせ等）を表示し、学生生活に必要な情報を迅速に提供しています。

売店(丸善)がリニューアルしました

第1大学会館の売店（丸善）が、さらなる学習環境に沿ったサービスの提供のため、店舗のレイアウトの変更等を行い、9月1日からリニューアルオープンしました。

リニューアルに伴い、新たに本学教員の著作物専用コーナーや全国の丸善のネットワークを活用した新刊コーナー（Msコレクション）などが設置され、これまで以上に品揃えが充実し、より一層「大学内にある本屋」らしい雰囲気となりました。

田中人吉市長(左)、蓑茂理事長(中央)、米澤学長(右)



山本御船町長(左)と蓑茂理事長(右)

人吉市、御船町と包括協定を締結

7月22日に人吉市と、8月28日に上益城郡御船町と、包括協定を締結しました。今後は、それぞれの市町と、包括的な連携のもとに様々な分野において、相互に協力し課題解決に取り組んでいきます。

自治体との包括協定の締結は、小国町、あさぎり町、和水町、菊陽町、天草市、水俣市、宇城市、菊池市、大津町、人吉市、御船町の11市町となります。

「熊本県立大学奨学金」創設

平成21年度の新入生から、学業・人物ともに優れた学生を対象とした奨学金制度を新たに導入することとしました。

1.対象
学部生のうち、学業･人物ともに優秀と認められる者(各学年12名)

2.奨学金の額
20万円／年(一括給付)

3.導入年度
平成21年度新入生より順次適用
(平成24年度をもって完全導入)

問い合わせ先／事務局学生支援課
TEL096-383-2929　内線205

食育標語コンテスト最優秀作品決定!

熊本県立大学では、学生に対する食育の普及啓発を目的として、昨年から「熊本県立大学食育標語コンテスト」を実施しています。第2回となる今年は、「毎日の食生活を考える」をテーマに6月に募集を行い、学生･教職員など42名から89作品の応募がありました。

最優秀賞には、文学部英語英米文学科4年　松尾　美波さんの「今日のごはん　明日のわたし　つくるもと」が選ばれ、6月の食育の日のイベントにおいて表彰状と副賞(食育の日の定食の食券1年分)が渡されました。

後援会便り

後援会とは、

- 本学学生の保護者またはこれに準ずる方を会員として組織されています。
- 大学の教育事業を後援し、大学と家庭及び社会との協力によって、大学教育の成果をあげることを目的としています。

(学生共同自主研究の一例)

「美里町恵照寺文書の位置づけに関する研究」

恵照寺に保管されている約1600点、2000冊以上の古文書･古典籍を調査し、文書の歴史や緑川文化圏における位置づけに関する研究が平成17年度から進められています。

保存状態の悪い古典籍を手袋を着け、取扱に注意しながら調査する学生たち

【後援会の事業】
次の4つの事業を中心に学生の活動全般を支援しています。

《就職対策事業》
- 資格等試験対策講座として、公務員試験対策講座、二級建築士受験対策講座、簿記検定講座等を開催。
- 適職診断プログラムの実施、各学部による就職支援事業への助成、OB・OGと連携した就職支援事業等の展開。

《学生活動支援事業》
- 各サークルの活動費の一部、全国大会出場経費等の一部を助成。
- 学生のリクエストに応じ図書を購入し、図書館へ配置。

《国際化推進事業》
- 海外留学・研修期間に応じて渡航経費の一部を助成。
- 留学対策講座の開催。

《教育研究助成事業》
- 学生共同自主研究助成
  (学生グループが自主的に行う研究経費の一部を助成)
- 国内学生大会等出場助成
  (インターゼミナール等への出場経費の一部を助成)

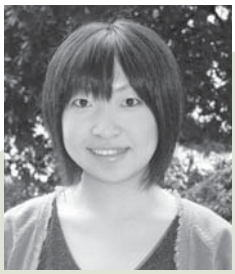
活き活き元気種（だね）!

このコーナーでは、サークル活動をはじめ、地域で活躍する熊本県立大生の声をお届けします。

子どもたちに楽しく「食」を学んでもらいたい

コープ熊本学校生活協同組合では、食育活動として子どもたちを対象とした「子ども特派員」活動を行っています。特派員の子どもたちは、「見て」、「聞いて」、「体験して」、「レポートする」ことで、農業への感謝と食べ物の大切さを学びます。

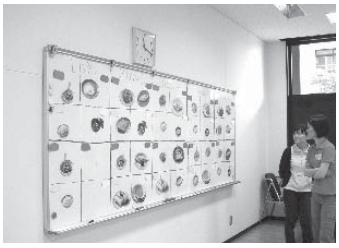
今年度の「子ども特派員」活動に、講師として参加している坂本さんにお話を伺いました。



環境共生学部　４年
坂本　美穂さん

食・健康環境学専攻※ 北野研究室の卒論生6名は今年度のコープ熊本の「子ども特派員」活動に講師として参加しています。今年度の「子ども特派員」活動のテーマは「MYおかずを作ろう！」で、子どもたちは、朝食に合うおかずづくりに挑戦しています。

まず第1回目の「食事バランスを考えよう」では、子どもたちに大学生になった気分で学習してもらおうと、本学の講義室で私たちが栄養・食事バランスについて話をしました。4つの色のお皿ランチョンマットを用い、黄色が主食、白は汁物、赤は主菜、緑は副菜と、この4つの色が揃うと栄養バランスがいいということ、さらに主食、汁物、主菜、副菜について具体的に料理や食材を説明しました。また、当日食べた朝食を4つの色に分け、自分の朝食の栄養バランスについて確認しました。次に、魚釣りゲームを行いました。これは、子どもたちを4～5人のグループにわけ、床に広げられた料理カードを魚釣りの要領で釣り、ランチョンマットに置き、一食のバランスのとれた食事にするというゲームです（写真1、2）。グループで力を合わせて、主食、汁物、主菜、副菜を考えながら料理を選び、早くできたグループを優勝としました。そして最後に私たち手作りの4つの色のお皿ランチョンマットをプレゼントしました。また、秋のコープ祭りにはこのゲームを出展します。



（写真1）

（写真2）

今回、講師としての参加ということで最初はどのように子どもたちに教えたらいいのかとても迷いました。少しでも楽しく学習してもらいたいと思い、こちらが一方的に話をするのではなく、子どもたちに発表してもらったり、考える時間をとったりと工夫しました。魚釣りゲームでは、子どもたち同士教え合ったり、なかなか釣れない子には励ましたりと一体感も生まれ、楽しんでくれたので嬉しかったです。私たちにとっても食育を実践でき良い勉強になりました。

第3回（11月）の「卵を使ったオリジナル料理レシピを作ろう」では子どもたちが考えた献立を本学の調理実習室で実際に料理し、そのレシピについて私たちがコメント、アドバイスすることになっています。この「MYおかずを作ろう！」を学習し、これからバランスのとれた食事を心がけてほしいと思います。

※食・健康環境学専攻は、平成20年4月から食健康科学科となりました。

イベント情報　みんなで参加しようよ！

熊本県立大学文学部英語英米文学科主催

英語教育シンポジウム

～授業実践を基に実践的コミュニケーション能力について考える～

日時／平成20年11月15日(土)午後1時30分～
場所／熊本県立大学中講義室2

本学大学院文学研究科では、英語英米文学専攻修士課程において来年度から新たに英語教育プログラムを始めます。また、地域へ開かれた学科を目指し、熊本県内の中学・高校の英語教員と連携しながら英語教育について考えていきたいと思っています。その試みの一つとして、英語教育に関するシンポジウムを開催することとなりました。今回のシンポジウムは、基調講演、授業実践報告、パネルディスカッションなどすべて熊本県内で活躍中の現場の先生方(高校・大学)で行うユニークなものです。授業例を基に、実践的コミュニケーション能力について考えます。教職志望の学生をはじめとして、語学学習に興味のある学生、高校生、地域の方など多くの方に参加していただきたいと思います。

問い合わせ先／事務局企画調整室
TEL096-383-2929　内線228

白亜祭を開催します

44回目を迎える今年のテーマは「しあわせ祭～Happy 4 u 4 ever～」。

ご来場者による「しあわせを作ろう」と題するオブジェの製作をはじめ、学生が考える「子どものための木製遊具」の展示など、楽しい企画がいっぱいです。ぜひお越しください。

主なタイムスケジュール

11月8日(土)
10:30～　大江捷也さん（熊本県文化協会常任顧問）講演会
13:00～　ミス・ミスター白亜コンテスト
14:00～　木村和也さん(熊本放送アナウンサー)講演会

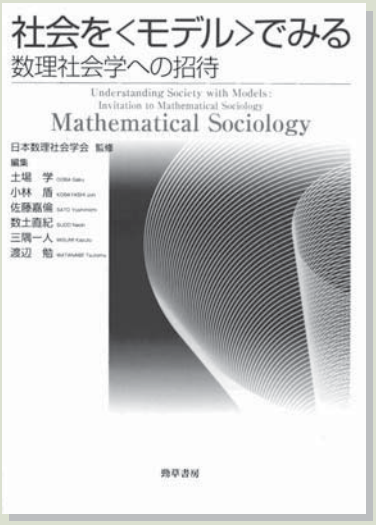
11月9日(日)
10:00～　学生版「オープンキャンパス」
13:00～　「エレキコミック」お笑いライヴ

問い合わせ先／白亜祭実行委員会または事務局学生支援課
TEL096-383-2929　内線249、205

おすすめの一冊

総合管理学部　教授
三浦　章

『社会を<モデル>でみる
数理社会学への招待』
日本数理社会学会監修　勁草書房



世の中には、個人的な事柄から社会的な事柄まで色々な問題が散在しています。「なぜ起きるのか」、「これからどうなるのか」という問いに対して、科学的に答えを導き出す方法の1つに、問題をモデル化し、そのモデルを基にした数学的アプローチがあります。

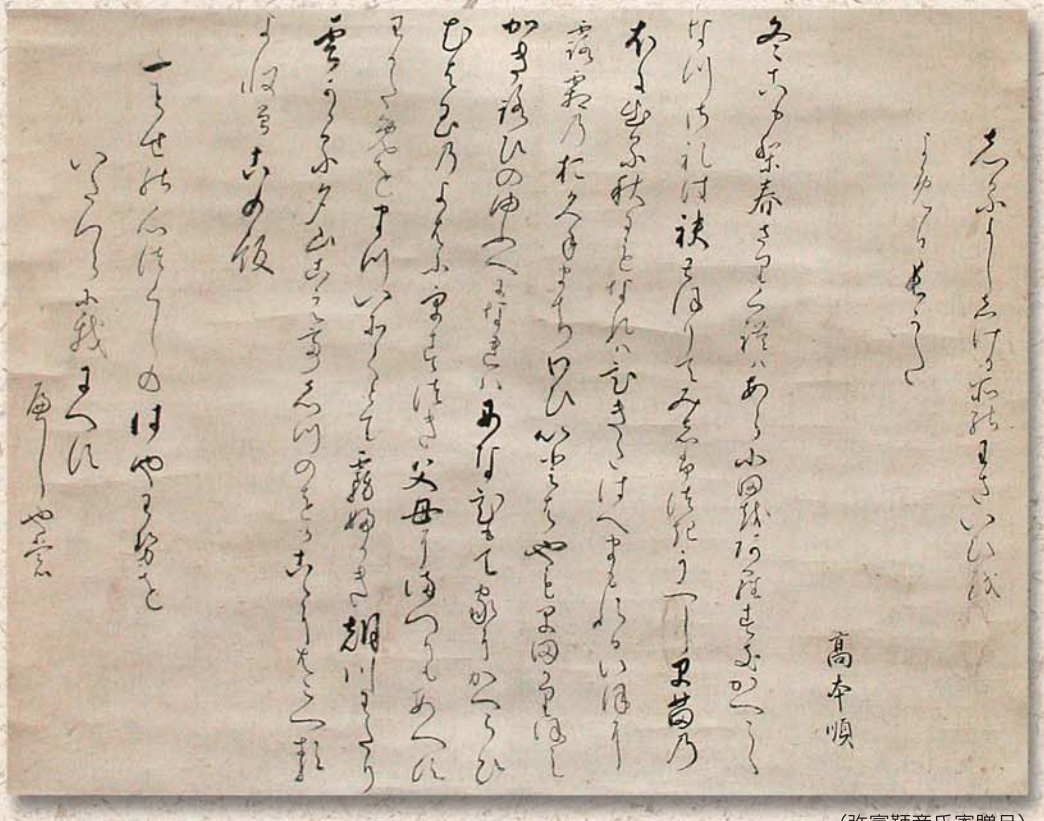
ここで紹介する『社会を<モデル>でみる　数理社会学への招待』では、社会学上の44問題に対する数学的アプローチ応用事例を、それぞれの専門の研究者が簡潔に紹介しています。「なぜ禁煙に失敗するのか」、「なぜ子供が増えないのか」、「なぜ高齢化は進むのか」等の事例解析は非常に興味深いものです。

本格的な理解には、社会学の知識とともに、確率・微分方程式・ゲームの理論等の知識が必要となりますが、そんな知識が無くても、楽しく読み進めることができます。そして、意外な分野で数学的アプローチが適用できることが分かります。

この秋の夜長、皆様の抱える問題解決の一助に如何でしょう。

図書館古文書ライブラリー

熊本県立大学学術情報メディアセンター（図書館）に
収蔵する貴重資料を紹介します。



（弥富鞆彦氏寄贈品）

「冬ごもり長歌幅」

書：高本紫溟（1738～1813）　1軸、縦41㎝×横56㎝、紙本、墨書

儒学者。熊本の人。名順、号紫溟。秋山玉山、藪孤山に続く、熊本藩校・時習館三代目教授。藩儒として務める一方で、和歌や和文を能くする国学者としての面を取り上げられることも多く、紫溟をして幕末の熊本における国学興隆の祖とする評もあります。

本作は、「しるよししける所のわさいひをよめる長うた」と題する長歌で、「冬ごもり長歌幅」の命名は、歌の冒頭、「冬ごもり」の5字によります。内容は、自身に納められた「わさいひ」（早稲米）に対しての謝意を述べるもので、語句や歌の異同を含みますが、同様の長歌が『肥後文献叢書』第2巻所収「高本順大人家集」中に収められています。

解説：柿本加奈さん（熊本県立大学 大学院文学研究科 日本語日本文学専攻 修士課程修了）

「春秋彩」へのご意見・ご感想お待ちしています。

本誌についてのご意見・ご感想を下記までお寄せください。
いただいたご意見は、今後の広報誌編集の参考にさせていただきます。
〒862-8502（住所記載不要）
熊本県立大学企画調整室「春秋彩」担当行
FAX 096-384-6765　E-mail kikaku@pu-kumamoto.ac.jp

発行：熊本県立大学
〒862-8502熊本市月出3丁目1番100号
TEL 096（383）2929（代）
http://www.pu-kumamoto.ac.jp/

再生紙を使用しています
PRINTED WITH SOY INK
この印刷物は大豆インキを使用しています